

中国人類学の古典を読む

―費孝通著 横山廣子訳 『生育制度―中国の家族と社会』

西澤 治彦

I

費孝通の『生育制度』が刊行されたのは国共内戦のさなかの一九四七年のことで、社会主義革命以降は、長らく日の目を見ることがなかった。この間の長い中断は、費孝通自身が反右派闘争や文化大革命で批判され、知的な活動を封印されていた時間と重なる。発行部数も限られていたし、右派として批判された著者の本は、図書館でも封印された状態だった。この長い中断は、研究者としての費孝通にとつての損失だけでなく、中国社会学にとつても損失であった。その後、三四年の歳月を経て、改革開放の進む一九八一年になり、再出版された。名誉回復されてからの費孝通は、それまでの失われた時間を取り返すかのように、精神的に研究活動を行なうと同時に、中国社会学・人類学の再建に尽力し、二〇〇五年に逝去された。

『生育制度』は中国で再刊されて間もない一九八五年に、日本でも横山廣子氏によって東京大学出版会から邦訳が刊行されている。それから三五年の年月が流れているが、先年、本書を大学の演習で輪読する機会があった。本稿はこれを期に、本書のもつ価値を改めて考えてみたい。長く読み継がれる本にはそれなりの理由があるものだ。

日本語版への序文にあるとおり、本書は三部作の第二部として意図されていた。第一部は、一九四八年に刊行された『郷土中国』（一九四八年に刊行された『郷土重建』はその兄弟編）で、中国社会システムの分析が主題であった。第二部の『生育制度』は、そのシステムがどのように維持されているか、という分析が主題となっている。なお、第三部は変化の問題を扱う予定であった。

もう少し本書が成立するまでの背景をみておこう。一九三八年、留学先のロンドンに於て *Peasant Life in China* の校正を終え、帰国の途についた彼を待っていたのは日中戦争の戦禍であった。清華大学も昆明に移転し、北京大学など西南聯合大学を構成していた。ここで燕京大学時代の恩師である呉文藻と再会し、彼の助力によって昆明郊外の禄豊県の農村調査を行ない、その成果を携えて一九四三年にアメリカに渡り、*Earthbound China* などを出版する。一九四四年に帰国すると、雲南大学と西南聯合大学にて、家族問題と農村社会の授業を担当した。生活のためもあり、一回の講義が終わるごとに文章にして雑誌などに発表していった。そして終戦となり、一九四六年に北京に戻る前に、それまで発表してきた文章をテーマごとに分類し、農村社会に関するものを『郷土中国』に、家族問題に関するものを『生育制度』としてまとめることにした。編集作業の仕上げは、故郷の江蘇省で行ったが、当初の計画であった親族制度に関する数章を追加することなく、切り上げるしかなかった。

これは費孝通にとって心残りなことであったようで、彼は調査研究活動が再開されて間もなく、家族制度に関する二本の論文を発表している。「中国家族構造の変動」（一九八二）と「家族行動の変動における老人の扶養問題」

(一九八三) がそれであるが、日本語版の出版に際し、この二本の論文が付論として付けられた。これは本書の成立の事情や費孝通の心情を考えると、極めて妥当な判断であったと言える。

II

さて、初版の出版から七十年以上を経た今日、日本の読者にとって本書を読む意義は何であるか。名著ともいうべき『郷土中国』の姉妹編であるということも別にしても、『生育制度』には、個別の価値がある。ここで再び「日本語版への序文」を見てみよう。彼の言葉によると、本書を貫いている一つの観点は、個人に生死がある一方、社会は継続していかなければならないという矛盾が存在し、この矛盾を解決する一連の方法が必要であるというものだ。この矛盾は個体の新陳代謝によって解決されるが、この過程は単に生物的機能に依存するだけでは完成されず、社会的な養育活動も必要になってくる。新しい個体が生まれただけでは、社会の維持は保障されない。いかなる集団にも、歴史的に積み上げられてきた、社会的にこの過程を完成させる方法があり、これを彼は「生育制度」と名付けた。その意図は、通常考えられている「性愛―結婚―家庭―生育」という順序を逆から考え、生育の必要性から「家」が出現し、その為に結婚の手續きがあり、それを保障するために社会が定める異性関係が発生する、という発想に基づく。その際、彼は個人と社会の関係を明確に定義している。即ち、社会は個人によって形成されるが、多くの個人がいったん共同生活を営む集団を形成すると、個人を凌駕し個人を支配する実態が生まれる。これが社会である。社会は個人の生活様式を型にはめるものでもあり、生活していこうとする人間は社会から離れることができない、としている。このように、本書のユニークさは、家族制度から社会を論じるのではなく、社会という「超システム」^(注)の維持

という視点から、演繹的に家族制度を論じている点にある。そしてその大胆な試みは、やや荒削りなどところもなくはないが、多くの新たな知見を生み出しており、成功していると言えよう。

もう一つ、本書に貫かれている視点は、中国文化の観点から家族制度が論じられているということである。費孝通は、西欧文化の影響を強く受けているが、自分が中国文化の中で育った人間であることを自覚している。俗諺にある「伝宗接代」の如く、中国文化の社会観とは、社会の前に個人を置くのではなく、社会の中に個人を置く、というものだ。その上で、西欧で主流の学説に対し、社会は集団内の多くの個人の間の契約的結合によつては成立しえない、と言い切っている。

当時の費孝通は英文でも中国に関する本を書いているが、『郷土中国』と『生育制度』は、中国人学生向けの講義がベースにあり、中国人読者を対象としている。とはいえ、この二冊は、三年間のイギリス滞在と一年間のアメリカ滞在の経験が踏まえられており、人類学者による先行研究をベースに、自らの西欧社会の分析も加えられている。こうした視野の広さが人類学的なスケールの大きさを生みだし、本書の魅力となっている。邦訳では適切にも「中国の家族と社会」と副題が付けられているが、費孝通の目指したのは、あくまで人類に普遍的なシステムをモデル化することにあつた。実際、論じられているのは人類一般の話である。但し、費孝通の社会観が中国文化に立脚していること、中国の事例も多く取り上げられていることから、本書を中国の家族論として読むことも可能である。別な言い方をすれば、家族論一般と中国の事例とがうまく融合していて、読者は一読すればその両方を同時に理解することができるようにもなっている。

そのいずれにおいても、費孝通の独自の見解が述べられており、それが今日、本書を読み返しても決して古さを感じさせない理由であろう。一般論として読んだ場合、以下の諸点が注目される。即ち、生理的養育は単系（母系）で

あるが、養育は父母の双系で為されること、この双系への変化こそが人の人たる所以（子猫は父親を知らない）という指摘がされている。これは、「社会的に作られた父性」が家族の誕生に大きく影響しているという、近年の霊長類研究の成果（注3）と照らし合わせても、鋭い指摘である。インセスタブーに関しては、ウェスターマルクやフロイトの説を批判的に紹介しつつ、性的関係は文化に先行するもので、社会的な産物を破壊しかねない力を持っていること、それ故に社会構造の安定を維持するためには性という力を制圧せねばならず、外婚規定が生まれたとする。外婚規定は生活集団に属していない者同士の間婚姻関係を作るものであるという解釈は、後のレヴィーストロースの交換論に繋がるとも言える。これと関連して、異性関係の制限を婚姻の基本的意味と見なすべきではない（夫婦外の性生活が自由であろうと、婚姻関係の混乱を引き起こし得ない）とも主張している。これも、霊長類学者が主張する、家族を支えているのは性関係ではなく、経済関係（具体的には食事を共にすること）という指摘と相通じるものがある。

社会構造における「基本三角形」のモデルも独自の見解といえよう。即ち、二点間（夫婦間）の関係は第三の点（子供）の存在によって固定される、という考え方である。夫婦関係は親子関係を前提とし、親子関係もまた夫婦関係を必要条件とする。夫婦間には実線が引かれているが、第三点（子供）はまだ虚点であり、子供が生まれて初めてこの三角形が実線で結ばれ、安定する。虚点は点がないのとは違う。但し、子供が生まれないこともあり、この段階の夫婦には緊張と未確定の力が内包されている、としている。日本でも「子はかすがい」と言う言い回しがあるが、費孝通のモデルはこれを力学的に説明したといえよう。この「基本三角形」は、まさに「基本家族」（マードックのいう核家族）に他ならない。ちなみに、恋愛のもつれを表わす「三角関係」は水平上の三点でしかなく、恋愛は多元的であるが真の三角形を生み出し得ないこと、一夫多妻制も多角関係ではなく、複数の三角形が一つの頂点を共有しているだけである、としている。

本書の後半は、こうした家族制度が世代によってどのように継承されているのかを分析している。費孝通はまずパークのモデルを引き、「共生」と「契合」の二つの概念を区別する。即ち、人間関係には「共生」（互いに相手を利用）と「契合」（相手を同様の意識と人格を有する者とみなす）とがあり、後者の関係から道徳が生まれ、社会が形成される。その上で、親子関係は、生理的な関係から共生関係を経て、契合関係へと変化していくとしている。やがて子供は「社会的離乳」をし（成人式はそのための儀礼）、新たな三角形を形成し、元の家族は人知れず解体していく。

こうした「社会継替」（社会の構成要素の代替わりを指す造語）においては、親族原理が利用される故に、親族組織に世代別、男女別、単系重視、親疎の程度といった特徴が生じた、とする説も興味深い。「世代参差」も費孝通の造語であるが、これは世代交替が必ずしも親子間の二世代だけではなされない、という意味が込められている。また、家族レベルは双系なのに、家族レベルを超えると単系（多くは父系）になるのはなぜか、という疑問に対しては、マリノフスキーの学説を敷衍し、明確に答えを出している。^{（注5）}人類社会において単系が偏重される理由は、財産や権力の継承は双系では複雑になりすぎて不可能になるからだという。つまり、社会継替が単系で為される故に、親族体系もまた単系とならざるを得ない、という訳だ。生育という機能を持った家族が人類に普遍的なのに対し、単系出自集団が必ずしも普遍的でないのは、それが持つ機能が普遍的ではないからである、というのも明快である。兄弟間の競合関係や分家と老人扶養の制度もこうした文脈の中で説かれている。

人口問題についても興味深い指摘を行っている。即ち、社会の容量（人口）は構造の限定を受けること、人口過多は病状であり病源ではないこと、無職の人々は予備軍として社会の必要物であること、などである。そしてマルサスを批判しつつ、産児制限の必要性を説く。

日本の読者としては、こうした一般論も示唆に富むが、中国の家族制度を分析した部分も興味深く思うのではない

だろうか。いくつかの例を挙げれば、墮胎、嬰兒殺し、遺棄致死の事例が西欧社会と比較して中国に多いこと、中国の夫婦が経済上の協働を重視し、欧米に比べて感情生活が薄いこと、などが挙げられる。費孝通はこれらを中国伝統文化の病癰としている。これ以外にも、童養媳トシヤシの制度、『紅樓夢』に描かれているイトコ婚や妾の子供の地位、上層階級における乳母制度、親族体系にみられる隔世代継承原則、居住形態についても家族と世帯とが必ずしも一致しないことなど、随所に中国ならではの特徴が紹介されている。具体例としては、故郷の江蘇省や滞在中の雲南省のほか、一九三五年に調査した広西の花藍瑤の事例が紹介されている。

III

本書は七十数年前に書かれた家族制度論ではある。その後、出自を核とする親族組織の研究は大きな進展を見せており、非単系出自に関しても精緻な議論がなされている。とはいえ、本書の議論のうち、今日、学問的に大きく修正されるべきものはない。モーガンの家族の進化モデルも批判的に紹介されている。それもそのはずで、費孝通の議論の背景には、師であるマリノフスキーやファース、ラドクリフ・ブラウンなどの当時のイギリス社会人類学の最先端の知見が踏まえられている。その結果ともいえるが、今日読み返してみると、本書は構造機能主義的な考え方で貫かれている。もともと、構造機能主義自体は一つの方法論であり、構造主義やそれに続く新たな方法論に取って代わられたからといって、決してその有効性を失っているわけではない。

費孝通が人類学を学んだのは、人類学が人類社会のさまざまなことを明らかにし、社会科学としてその地位を確立しつつあった時代であり、エネルギーに満ちた時代でもあった。中国にとっても、民国期は国民国家の形成へ向け

て、気概と活気のある時代であった。本書はそうした時代のエネルギーを背景としつつ、根源的な思索を重ねて出来上がったものである。本書がオリジナルな見解に満ち、今日読み返してみても読み応えがあるのはこうした時代背景も関係しているよう。

費孝通は、家族制度を論じ、続いて「単系出自集団」へ議論を発展させようとするところで本書を終えている。中国における「家」から「宗族」までの連続性はよく指摘されるところであり、当然、費孝通もそのことの重要性には気がついていった。終章では「氏族」に言及しているが、今なら「宗族」、もしくは「単系出自集団」や「リニージ」という学術用語を使って議論を展開したことであろう。

本書のタイトルである「生育制度」をはじめとして、本書にはいくつかの造語が使われている。これらは日本語はもちろんのこと、中国語の辞書にも載っていない。訳注で解説されてはいるが、日本の読者としては少し気になるところである。もつとも、これらの原語を邦訳に際しても残して欲しいと依頼したのは費孝通自身であった。この点を除けば、日本語も正確でこなれていて読みやすい。古典の引用についても丁寧な注が施されている。

本書を家族制度の一般論として読むと刺激的な本であるが、中国の家族制度論として読んだ場合、ここで描かれているのは、やはり七〇年前の中国の家族制度であることは否定できない。この間の変化は決して小さなものではない。その意味でも、付論としてその後の変化に関する論文が付けられたことによって、本書はより現代にアップデートされた結果となり、今後も読み継がれていくべき本となったと思う。

注

- (1) 超システムに関しては、近年、生命科学の分野から興味深い議論が展開されている。例えば、多田富雄著一九九三『免疫の意味論』（青土社）、一九九七『生命の意味論』（新潮社）などを参照のこと。
- (2) 当時の先行研究としては、W.H.Rivers が一九二四年に出版した *Social Organization*、Kegan Paul LTD（リヴァース著井上吉次郎訳一九四四『社会体制』育英書院）や、Robert Lowie 1920 *Primitive Society*、Horace Liveright（ロバート・H. ローウィ著河村只雄訳一九三九『原始社会』第一出版社、河村只雄・河村望訳一九七九『原始社会』未来社）などがある。
- (3) 代表的な研究としては、山極寿一著一九九四『家族の起源』（東京大学出版会）、二〇二二『家族進化論』（岩波書店）などがある。
- (4) Richard Wrangham 2009 *Catching Fire: How Cooking Made Us Human* Basic Books（依田卓巳訳二〇一〇『火の賜』N T T出版）などがその代表的な研究である。
- (5) Bronislaw Kasper Malinowski 1927 *Sex and Repression in Savage Society*（マリノウスキー著阿部年晴・真崎義博訳一九七二）未開社会における性と抑圧』社会思想社、二〇一七『未開社会における性と抑圧』ちくま学芸文庫、筑摩書房）

付記

本書評を脱稿後、潘光旦が「派與滙 作為費孝通『生育制度』一書的前」と題し、序に代えて、本書に関連して長い評論を書いていることを知った。一九四八年に上海の観察社から刊行された『政学罪言』に収められたもので、『潘光旦選集』第三巻に収録されている。序とはいえ、三八頁に及ぶ長文のもので、『生育制度』そのものを評論するというよりも、費孝通の研究姿勢を題材として、社会学に対する自説を展開したものである。それには当時、優生学を唱えていた潘光旦の立場が鮮明に提示されている。

この一文に対しては、費孝通自身が一九九三年に自身の研究生活を回顧した「個人・群体・社会―一生物学歴程的自我思考」（『費孝通全集』第一四巻所収）にて言及している。『生育制度』の草稿は、潘光旦と共に過ごした昆明時代に書いており、費孝通は草稿を書き上げた後に潘光旦に見せ、且つ、序を書いてくれるように依頼した。しかしそれは序にしては長い文章となつたうえに、生物としての個人が社会や文化に対する作用を無視している、という批判的なものとなつた。『生育制度』の観察社版は残念ながら日本には一冊もないため、実際にこの序が掲載されたかを確かめることはできなかった。一九八一年に再版されたものには、潘光旦の序がないことから、おそらく観察社版でも掲載が見送られたものと思われる。潘光旦の『生育制度』をめぐる議論に関しては、機会があれば別稿で論じたい。